

繪本

峠

三吉

敵の手は 傷つけられた

涙死の母親にみせられた その子の繪本。

右かい格子窓から 一筋の夕日か

負傷者收容所の 冷たい床に落ちた 止まる。

火くくした 顔かみのうへに 心をけ持ち

中つくりと線つてやう 青や赤の幼い繪

古いなじみの お伽ばなし。

力々力々山の狸のやけこに 眼をむけた

隣りの男の呻きも 一つしか絶えて

ほとわりと凝視めんたい 母親の瞳に

このどほい 瞳がな水。

薰尿の臭臭のなかに 苦痛も 怒みも

子につながらる希いすえ 訴えぬまゝ

死んでゆく。

しんでゆく。